

環境経営

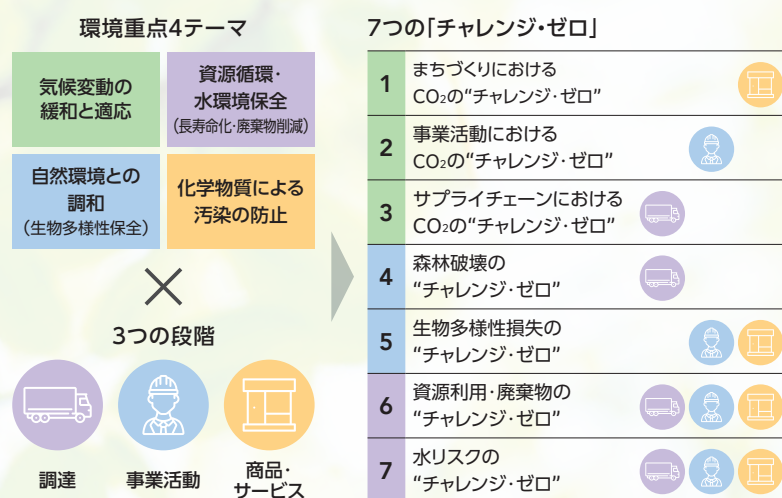
環境長期ビジョン

当社は、大和ハウスグループ共通の環境長期ビジョン“Challenge ZERO 2055”のもと、サステナブル（持続可能な）社会の実現を目指し、グループ、グローバル、サプライチェーンを通じて環境負荷“ゼロ”に挑戦しています。

この長期ビジョンを達成するために、「4つの環境重点テーマ」と「3つの段階」から、特に重点的に取り組むものとして7つの「チャレンジ・ゼロ」を設定しています。この長期的な方向性を出発点とし、そこから逆算（バックキャスト）する形で、2030年のマイルストーン、5ヵ年ごとの環境行動計画「EGP（エンドレス グリーン プログラム）」を策定し、環境活動を推進しています。

「未来から今を考える——」

フジタグループでは、この視点で、持続可能な社会の実現に向けた歩みを進めています。



Challenge ZERO
2055

環境負荷
“ゼロ”に挑戦*

※気候変動の緩和と
適応は2050年

フジタの環境活動方針

環境行動計画「エンドレス グリーン プログラム 2026」（2022年度～2026年度）に基づき、フジタグループでは環境目標を32の管理指標に落とし込み、四半期ごとに進捗管理と報告を行っています。また、当社独自の「環境活動方針」を軸として年度ごとに重点テーマを設定し、取り組みを推進しています。「2025年度環境活動方針」では《法令違反“ゼロ”》《重大な環境事故“ゼロ”》《EGP2026目標達成》を目標に掲げています。環境教育をとおして法令遵守を徹底し、環境リスクの最小化に取り組んでいきます。



フジタのGX戦略

脱炭素社会に向けた経済社会システムの変容をいち早くとらえ、当社が描く「未来のカたち」を具現化するためのビジョンとして、2024年度にGX戦略を策定いたしました。フジタはDXを推進力の一つとして建設・街づくりのあらゆる場面でGXを進め、地球と未来に必要とされる価値を提供し続ける会社を目指していきます。

GX戦略における3つの柱を軸に、「エンドレス グリーン プログラム 2026」の目標必達、再エネ発電事業などの社会と顧客の脱炭素への貢献、プライムカーボン®に代表される画期的な技術開発、資源循環・自然共生の視点から

の持続可能な地域づくりを進めていきます。

持続可能な成長と脱炭素化の実現を両立するためには、同じ目標を共有するステークホルダーとの連携が重要となります。大和ハウスグループでは、SBT、EP100、RE100などの国際イニシアチブに参加し、国際的課題に対応しています。また、フジタではTCFD、GXリーグ、気候変動イニシアティブ（JCI）に賛同し、エネルギー効率の向上、再生可能エネルギーの導入を加速させる気候変動対策を強化しています。

GX戦略 3つの柱



気候変動に関する環境中長期目標

「4つの環境重点テーマ」のうち、「気候変動の緩和と適応」を最重点テーマとして、2050年カーボンニュートラルの実現に向け、大和ハウスグループが一丸となり取り組みを加速しています。大和ハウスグループの中長期目標と整合した温室効果ガス削減目標を定め、確実な削減に向けた実効的な施策を実施していきます。



Topics

炭素を固定したバイオ炭インターロッキングブロック

株式会社トクヤマ、株式会社トクヤマアートLABOと共同で、CO₂排出量を実質ゼロとした歩道用舗装材「バイオ炭インターロッキングブロック」を開発しました。コンクリートに木質バイオマス発電の副産物であるバイオ炭を混ぜ、CO₂排出量削減と資源の有効活用を実現した製品です。脱炭素に貢献する製品として、普及に向けた取り組みを継続します。

バイオ炭インターロッキングブロック



(a) 断面
(上:バイオ炭無し、下:バイオ炭有り)

(b) 敷設状況



ENVIRONMENT

環境の取り組み事例



ENVIRONMENT

自然共生に向けて



ZEB予測システムの開発

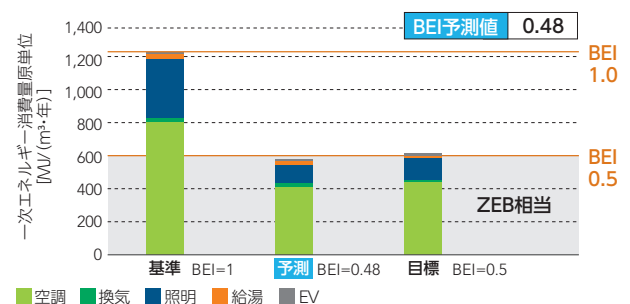
ZEB認証に必要な省エネ性能の計算指標であるBEI (Building Energy Index) の算出は、計算が煩雑で数週間の時間がかかり、ZEB化の検討が迅速に行えないことが課題でした。

そこで当社は、ZEB提案に迅速な対応ができるよう、建築・設備仕様が確定していない設計初期段階から、省エネ性能 (BEI) の予測が可能なシステムを開発し、運用しています。本システムは、図面がなくても、部屋の用途ごとの床面積や主な設備仕様、設計目標値などの最低限の情報を入力するだけで簡単にBEIを予測することができます。これにより、BEI値の把握にかかる作業時間を数週間から1時間以内に短縮できました。

1 まちづくりにおけるCO₂の“チャレンジ・ゼロ”

当社は、設計の川上段階からのスピーディーなZEB提案を可能とすることで、2030年度に当社が設計・施工する建物の全棟ZEB化を目指します。

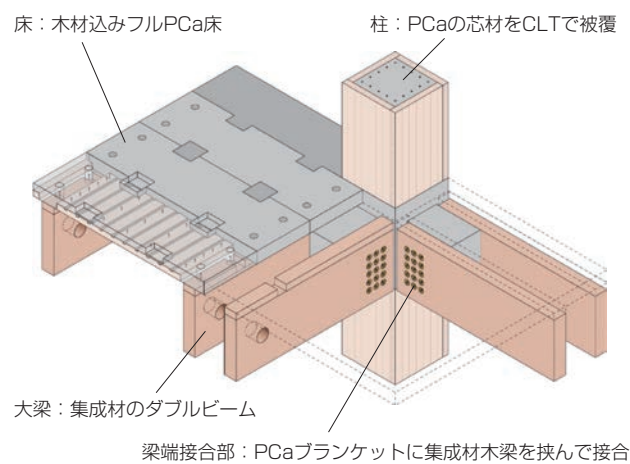
BEIの予測結果例



木構造技術の開発

住宅・建築物分野の脱炭素化の重要な取り組みの一つである木造化に対し、当社は独自技術として木材とコンクリートを組み合わせた木質混合構造「FWdPC® 構法」の開発を進めています。「FWdPC® 構法」は木材で覆った鉄筋コンクリート柱と集成材の梁で構成するハイブリッド構法です。CO₂固定に有効な木構造とフジタの得意分野であるプレキャストコンクリート (PCa) 技術を組み合わせ、脱炭素と省力化を実現します。現在、フジタ技術センター敷地内で本構法を採用した付属棟を建設中です。付属棟では「カンタイパネル」「バイオ炭インターロッキングブロック」「炭素貯留型レインガーデン」などのさまざまな開発技術を適用します。フジタのGX技術を体感する場として活用する予定です。

FWdPC® 構法の基本構成模式図



作業服のアップサイクルプロジェクト

GX戦略の柱の一つ「新たな環境価値の創出」に向け、資源循環の推進に取り組んでいます。その一環として、未利用資源の活用に着目し、2024年度は従業員の使用済み作業着を再活用するアップサイクル実証を行いました。アップサイクルとは、不要になったものに付加価値を加え、新たな製品へと生まれ変わらせる取り組みです。今回はコースターに再生し、今後はイベント等でお客さまへ配布を予定しています。部署や作業所の協力のもと進めた本プロジェクトは、社内の環境意識を高めるきっかけにもなっています。今後は多方面との連携を視野に、対象とする素材

や再生品の活用領域を本業と親和性のある形で広げる可能性を模索していきます。



ネイチャーポジティブに向けた取り組み

生物多様性保全方針

～身近な自然と暮らしを守る～

当社は生物多様性保全方針のもと、ネイチャーポジティブ経営に向けた取り組みを進めています。

2024年度には自然資本への依存や影響を評価し対応していくために、TNFD開示に向けた準備段階である「スコーピング」を実施しました。このほか、自然の多様な機能を生かした「グリーンインフラ」の実装に向けた研究開発や、土地利用改変による生物多様性への影響を定量評価す

5 生物多様性損失の“チャレンジ・ゼロ”

るツールの開発にも注力しました。

また、自然共生に特化した部署を設置し、環境認証取得支援のほか、ネイチャーポジティブの貢献につながるシステムやツール開発を進めています。

脱炭素、資源循環との関連性も考慮しながら、社内外での対話を重ね、適切な自然資本の利用に基づく、自然共生社会の実現を目指していきます。

2024年度実績 生物多様性(国内単体)		
在来種植栽実施率	2024年度目標	12%以上
	2024年度実績	56%

森林破壊ゼロに向けた取り組み

建設業においては、構造材やコンクリート型枠材において木材を多く使用します。当社では森林破壊ゼロ方針のもと「生物多様性ガイドライン【木材調達編】」を運用し、サプライチェーン全体で森林破壊ゼロに取り組んでいます。目標達成には木材調達先である一次・二次サプライヤーとの協働が不可欠となるため、各社に森林破壊ゼロ方針の策定に賛同いただくための対話を継続しています。毎年森林破壊ゼロ方針設定率に関する調査を実施し、サプライチェーン一体での連携を進めています。

4 森林破壊の“チャレンジ・ゼロ”

Cランク木材*比率の低減

森林破壊リスクのあるCランク木材の使用比率ゼロを目指し、目標を設定し進捗管理を行っています。2024年度はCランク木材比率目標2%以下に対し1.9%と、前年度と比較しても4.9ポイントの大幅削減となりました。

*「Cランク木材」定義
「生物多様性ガイドライン【木材調達編】」に基づき、合法性と持続可能性の観点から、調達木材をSSS・SS・S・Cランクの4段階で評価。Cランク木材は、「供給源が明らかであること」「天然林の大伐採がない」などの評価基準を満たさない木材。

Topics

技術センターにおける自然共生型の緑地管理

TNFDでは事業における自然共生が求められています。その推進方法検討の一助とするため、自社施設である技術センターにおいて生物多様性に配慮した緑地管理手法の検証を進めています。2024年度は包括的な生物調査を実施、重要種の把握と除去が必要な外来種を把握しました。今後はこれらのデータに基づく植栽管理を推進、ランドスケープアプローチ*の視点も取り入れた緑地管理に取り組んでいきます。

*ランドスケープアプローチ: 自社敷地のみならずその周辺の自然への配慮や、ステークホルダーとの協働により課題解決を行うこと。

2024年度調査で確認された生物種(一例)

植物	コイケマ、クララ、オニシバリ
哺乳類	タヌキ、アナグマ
鳥類	セグロセキレイ、ビンズイ
爬虫類・両生類	シマヘビ、ヒガシニホントカゲ
昆虫類	ショウリョウバッタモドキ
水生生物	ドジョウ

